

可能を表す「見える」 「見られる」の用法別使用傾向

— コーパスに見る母語話者と非母語話者の
使用の異なり

森 敦子

◆要旨

本稿では、「見える」と「(可能形の)見られる」に関する母語話者及び非母語話者の言語使用を、名大会話コーパス及び日本語学習者会話データベースを用いて調査した。母語話者・非母語話者ともに「見られる」より「見える」の出現比率が高く、一見すると両者の言語使用は一致しているように見える。しかし、用法ごとに見た場合、両者の使用傾向に大きな差異があることが確認できた。とりわけ、OPIのレベルが中級以下の非母語話者においては、「見える」の過剰使用及び「見られる」の非用傾向が顕著であった。また、「見える」「見られる」に関して、日本語教科書と母語話者の実際の言語使用との間に、大きなずれがあることが確認できた。

◆キーワード

名大会話コーパス、日本語学習者会話データベース、出現比率、過剰使用、非用

◆ABSTRACT

This study investigated how native and non-native Japanese speakers use *mieru* and *mirareru*, using Meidai Dialogue Corpus and Database of Japanese Language Learners' Conversation. It was found that both native and non-native speakers use *mieru* more than *mirareru*. Although, at first glance, the usages of native and non-native speakers seem to be consistent, through a more detailed analysis, I found significant differences between them. In particular, low proficiency non-native speakers tend to overuse *mieru* and underuse *mirareru*. I also found that there is a large gap between the usages of these words in Japanese textbooks and actual speech by native speakers.

◆KEY WORDS

Meidai Dialogue Corpus, Database of Japanese Language Learners' Conversation, Usage ratio, overuse, underuse

Tendency of Usage of the Japanese Potential Verbs *mieru* and *mirareru*

A corpus-based analysis of language usages
in conversation by native and non-native speakers

ATSUKO MORI

1 はじめに

「まっすぐ行くと、右手にコンビニが見える」という場合の「見える」は自発動詞、「新宿に行けばいろいろな映画が見られる」という場合の「見られる」は動詞「見る」の可能形である。両者はともに「対象物を視覚でとらえることができる」という内容を表し、意味的に重なる部分が多い。そのため、日本語能力が上級レベルの非母語話者でも「見える」「(可能形の)見られる」(以下、「見られる」と表記)の使い分けに関する誤用は多い。そこで本稿ではまず、「見える」「見られる」にはどのような用法があるのかを分析し、その上で、以下の3点について調査する。

- 1) 母語話者・非母語話者はそれぞれどの用法をよく使うか
- 2) 非母語話者の日本語能力によって使われ方に差があるか
- 3) 日本語教科書は言語使用の実態を反映しているか

なお、「見られる」と語根を同じくする動詞「見る」には様々な意味・用法があるが、本稿では「視覚で対象物をとらえる」という意味の「見る」に限定して調査・考察を行い、その他の意味・用法については扱わないこととする。

2 用法分類

山内・清水(2001)は、「見える」「見られる」を自発、能力可能、状況可能、心情可能の4つに分け、基本的に自発と能力可能は「見える」、心情可能は「見られる」を使用するとしている^[註1]。この考え方をもとに、本稿では「見える」「見られる」を9つの用法に分類する。能力可能と心情可能に関しては、山内・清水(2001)の分類をそのまま踏襲し、本稿では能力可能を用法<1>、心情可能を用法<9>とした。自発に関しては、山内・清水(2001)が自発としてまとめているものを、本稿ではさらに3つの用法に分けて考えたい。山内・清水(2001)は「典型的な自発表現」として(1)～(4)のような例をあげている。

- (1) ママ、見て。お星さまが見えるよ。 (山内・清水2001:110)
- (2) ひざが見えるような短いスカートは禁止です。 (山内・清水2001:110)
- (3) 君のりんごの方がおいしそうに見える。 (山内・清水2001:111)
- (4) 私には、彼が犯人であるように見える。 (山内・清水2001:111)

下岡(2005)は、自発「見える」には眼前性があり、それが「見られる」との最大の相違点であると述べている。しかし、(1)には眼前性があるが、(2)には必ずしも眼前性があるとは言えない。つまり、眼前性の有無という点から見ると、(1)と(2)は違う用法であると言えるだろう。また、飯田(1997:50)は、「無意的に視線を送った時、普段は目にするものではないもの、特に目立つようなものが偶然視界に入ってきた場合に「見える」を使うとしている。そこで、本稿では(1)のように眼前性のある自発表現を用法<2>、(2)のように眼前性の有無を問題とせず「特筆すべきもの」^[註2]が目に飛び込んでくることを表すものを用法<3>として区別することにした。また、(5)のように、それまで視野内になかったものが突然視野内に飛び込んでくるという場合も、用法<3>に含める。

- (5) 信号が変わり、タクシーがスピードをあげた。瞬間、店が見えたが、記憶の場所から1つずれている。 (BCCWJ:PB39_00024)

次に、(3)と(4)について考えたい。(3)は目の前にある「りんご」がどのように目に映ったのかという「見え方」を問題にしている文であり、(4)は目の前にいる「彼」を見て犯人であるように感じられると判断している文である。(3)と(4)はどちらも、対象物を視覚でとらえていることを前提とし、その上で、対象物がどのように目に(あるいは心に)映るのかということの問題にしている。そこで、これらをまとめて用法<4>として扱うことにした。

次に、状況可能について考えたい。山内・清水(2001:109)は、「日本語においては、可能表現よりも自発表現の方が好まれる」という仮説のもと、状況可能の中で「視野内のものが自然に目に飛び込んで来る」という自発の条件を満

たすものには「見える」、満たさないものには「見られる」を使用するとしている。本稿では、状況可能で自発の条件を満たすものを用法〈5〉、自発の条件の「自然に目に飛び込んで来る」という部分を満たさないものを用法〈7〉、自発の条件の「視野内のものが」という部分を満たさないものを用法〈8〉とした。また、文脈によって自発の条件を満たすとも満たさないとも解釈しうるものは用法〈6〉とした。用法〈7〉は鑑賞・評価などの精神活動をともなう場合や、「見る」という動作が実現する可能性について述べる場合に用いられる。用法〈8〉は「存在する」という意味で用いられることが多く、また、いわゆる「ら抜き」は使われにくいことから、受け身の性質も併せ持っていると考えられる。本稿での「見える」「見られる」の分類は、以下のとおりである。

用法〈1〉 能力可能：「見える」を使用

視覚能力の有無、視力の良し悪しなど、対象物を視覚でとらえる能力を有しているかどうかを問題にする場合

(6) (視力検査で) この字が見えますか。 (山内・清水2001: 107)

用法〈2〉 自発1 (典型的な自発)：「見える」を使用

眼前性あり／特に可能の意味はない

(7) ほら、あそこに絵が見えます。 (飯田1997: 44)

用法〈3〉 自発2 (特筆すべきもの)：「見える」を使用

特筆すべきものが目に飛び込んでくる(目につく)場合／何か視野内に飛び込んでくる(出現・発見)場合／眼前性はなくても可

(8) 必要なら、蛍光管が直接見える器具を避けて… (略)

(BCCWJ: OC12_02182)

用法〈4〉 自発3 (見え方を問題にするもの)：「見える」を使用

すでに視覚でとらえているものが、どのように目に映るのかを問題にする場合／外見、程度、判断、評価など

(9) 今日の彼女は、いつもよりきれいに見える。 (山内・清水2001: 111)

(10) 星がはっきりと見えるかどうかで、大気汚染のバロメーターになる。 (BCCWJ: PN2g_00004)

(11) 彼は、あまり行きたくなさそうに見える。 (山内・清水2001: 111)

用法〈5〉 状況可能1：「見える」を使用

状況可能の中で、自発の条件を満たすもの／可能の意味を含む

(12) コピーの字が薄くて見えない。 (山内・清水2001: 112)

用法〈6〉 状況可能2：「見える」「見られる」どちらも使用可

状況可能の中で、「自発の条件を満たす」「自発の条件を満たさない」どちらも解釈しうるもの

(13) あの山の山頂に登れば、摩周湖の全景が見える／見られる。

(山内・清水2001: 113)

用法〈7〉 状況可能3：「見られる」を使用

状況可能の中で、「自然に目に飛び込んで来る」という自発の条件を満たさないもの／鑑賞・評価など、精神活動をともなうもの／「見る」という動作が実現する可能性について述べるもの

(14) 18時の電車に乗れば、私は19時からの『忠臣蔵』が見られる。

(下岡2005: 5)

用法〈8〉 状況可能4：「見られる」を使用

状況可能の中で、「視野内のものが」という自発の条件を満たさないもの／存在するという意味で用いられることが多い

(15) 南の島々では1年中色とりどりの花が見られる。(山内・清水2001: 114)

用法〈9〉 心情可能：「見られる」を使用

心理的問題に着目したもの

(16) 恥ずかしくて、相手の顔がまともに見られない。 (作例)

3 コーパス調査

2節では「見える」「見られる」を9つの用法に分類した。実際にはどの用法が多く使われているのだろうか。「見える」「見られる」の使用実態を明らかにするために、コーパスにおける出現頻度を調べた。本稿では紙幅の関係上、調査対象を話し言葉に限定し、母語話者に関しては名大会話コーパス^[註3]、非母語話者に関しては国立国語研究所の日本語学習者会話データベース^[註4]を用いた。また、「自発と思われる表現でも、否定になったときは、可能と区別しが

たいことがよくある」(寺村1982:276) ため、肯定の文のみを調査対象とした。なお、「見える」「見られる」の語彙選択の正誤に焦点を当て、語彙選択が正しく行われていれば、前接する助詞や動詞の活用に誤りがあっても正用として扱った。

以上の条件で目視により用例を抽出した結果、正用について、名大会話コーパスでは「見える」が149件(81.87%)、「見られる」が33件(18.13%)、日本語学習者会話データベース(母語話者の発話除く)では「見える」が98件(83.05%)、「見られる」が20件(16.95%)あった。母語話者・非母語話者ともに「見える」の方が多く使用されていることがわかる。

3.1 コーパスにおける「見える」「見られる」の用法別使用頻度

用法別の出現数(実数)と出現比率は、表1のとおりである。また、文字化の際に書き足した注釈部分などを削除して、MeCab0.98及びUniDic1.3.12で形態素解析したところ、名大会話コーパスは1,503,983語、日本語学習者会話データベースは960,652語(母語話者の発話除く)であった。これらの語数をもとに、100万語あたりの出現確率を求め、表1に示した。

表1 コーパスにおける「見える」「見られる」の出現頻度

用法	形式	母語話者			非母語話者		
		出現数	出現比率	出現確率	出現数	出現比率	出現確率
<1>	見える	10	5.49%	6.65	0	0.00%	0.00
<2>		29	15.93%	19.28	22	18.64%	22.90
<3>		20	10.99%	13.30	13	11.02%	13.53
<4>		78	42.86%	51.86	46	38.98%	47.88
<5>		7	3.85%	4.65	4	3.39%	4.16
<6>	両方	5	2.75%	3.32	14	11.86%	14.57
<7>	見られる	32	17.58%	21.28	14	11.86%	14.57
<8>		1	0.55%	0.66	5	4.24%	5.20
<9>		0	0.00%	0.00	0	0.00%	0.00
計		182	100.00%	121.01	118	100.00%	122.83

母語話者、非母語話者ともに用法<4>の出現比率が高い。実際の会話においては「すでに視覚でとらえているものの、見え方について述べる」場合に「見える」を使用することが多いということがわかる。

用法<6>に関しては、「見える」「見られる」どちらも使用可能であるが、実際には母語話者で5件全て(100%)、非母語話者でも14件中13件(92.86%)が「見える」を使用している。山内・清水(2001:110)は、状況可能で「見える」を使用するもの(本稿の分類では用法<5>)を、「見える」が「見られる」を侵食してしまった領域」と表現しているが、用法<6>に関しても「見える」による「見られる」の侵食が進んでいるようである。また、用法<6>の100万語あたりの出現確率は、母語話者が3.32、非母語話者が14.57であり、非母語話者には用法<6>に過剰使用の傾向が見られる^[註5]。

用法<1>に関しては、母語話者の100万語あたりの出現確率が6.65あるにもかかわらず、非母語話者では1度も出現していない。母語話者の出現確率が6.65より低い用法<5>(4.65)、用法<6>(3.32)、用法<8>(0.66)において、非母語話者の出現確率がそれぞれ4.16、14.57、5.20あることを考えると、用法<1>の出現確率の低さは注目に値すると言えるだろう。なお、用法<9>は、表1では母語話者・非母語話者ともに0件となっているが、否定の形ではそれぞれ2件ずつ出現している。用法<9>が実際の会話の場面で全く使用されていないというわけではないということを、補足しておきたい。

3.2 OPIのレベル別に見る使用状況

本節では、学習者会話データベースに情報として付加されているOPIの判定結果をもとに、非母語話者のレベル別に使用状況を見ていく。

表2 OPIのレベル別「見える」「見られる」の使用状況

	中級		上級		超級	
	出現数	出現確率	出現数	出現確率	出現数	出現確率
見える	58	116.21	37	104.09	3	80.71
見られる	6	12.02	12	33.76	2	53.81
計	64	128.24	49	137.84	5	134.52

まず、「見える」と「見られる」の使用比率の異なりについて見てみたい。日本語学習者会話データベースにおいては、OPIで初級と判定された非母語話者には「見える」「見られる」の正用は見られなかったため、中級・上級・超級の3レベルについて比較を行った^[註6]。どのレベルにおいても「見える」の方が「見られる」よりも多く使用されているが、その比率はレベルによって異なっている。表2で「見える」と「見られる」を合算した100万語あたりの出現確率を見ると、上級(137.84)と超級(134.52)に比べて中級(128.24)がやや低くなっているが、大きくは変わらない。超級はデータが少ないため上級と中級の2つについて、語別に出現確率を比較してみると、「見える」に関しては、中級(116.21)より上級(104.09)の方がやや下がるものの、大きな差はない。一方で「見られる」に関しては、中級(12.02)は上級(33.76)の1/3近くとなっている。中級においては「見られる」の非用傾向が顕著であると言える。

次に、「見える」と「見られる」の使用比率について見てみたい。「見られる」が使用されているものは、中級では用法<6>のうち1件と用法<7>の5件、合わせて6件(9.36%)のみである。一方、上級では12件(24.49%)、超級では2件(40.00%)であった。図1からもわかるように、レベルが上がるにつれて「見られる」を使う比率も上がっている。

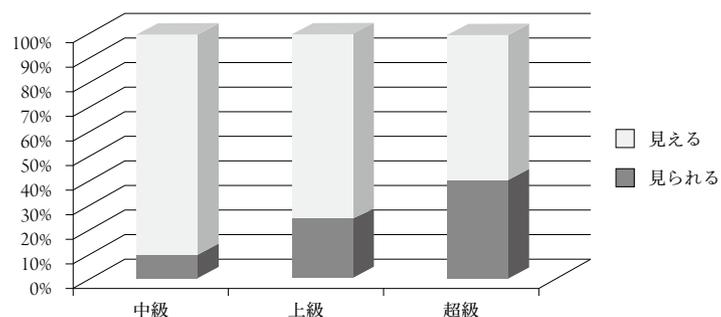


図1 OPIのレベル別「見える」「見られる」の使用比率

次に、OPIのレベル別に、「見える」「見られる」の用法別使用状況の分布を見てみたい。表3に示した非母語話者の用法別分布と、表1で見た母語話者の用法別分布とをPearsonの積率相関係数で検討してみると、母語話者—中級間で0.822、母語話者—上級間で0.940であり、中級より上級の方が母語話者の使用バランスに近づいていることがわかる^[註7]。

表3 OPIのレベル別にみた用法別分布

用法	形式	中級		上級		超級	
		出現数	出現確率	出現数	出現確率	出現数	出現確率
<1>	見える	0	0.00	0	0.00	0	0.00
<2>		13	26.05	6	16.88	3	80.71
<3>		9	18.03	4	11.25	0	0.00
<4>		24	48.09	22	61.89	0	0.00
<5>		0	0.00	4	11.25	0	0.00
<6>	両方	13	26.05	1	2.81	0	0.00
<7>	見られる	5	10.02	7	19.69	2	53.81
<8>		0	0.00	5	14.07	0	0.00
<9>		0	0.00	0	0.00	0	0.00
計		64	128.24	49	137.84	5	134.52

用法<6>は、全14件のうち13件が中級レベルに集中している。用法<6>の出現確率は中級レベルで26.05、上級レベルで2.81であり、上級レベルでは母語話者の出現確率(3.32)に近い数値となっている。つまり、表1で確認した用法<6>の過剰使用は、中級レベルに限定した特徴であると言える。用法<6>の過剰使用が抑えられることが、母語話者の言語使用に近づく要因の一つであると言えるのではないだろうか。

3.3 学習者会話データベースにおける「見える」「見られる」の誤用

「見られる」よりも「見える」の使用頻度が高いという傾向は、誤用パターンにも影響を与えている。日本語学習者会話データベースでは、否定を除く

「見える」「見られる」の誤用が16件見られた。以下の表4は、学習者の誤用パターンを示したものである。なお、「その他」とは、正用が「見える」でも「見られる」でもないもの（例えば「見る」「見つかる」など）を指している。

表4 学習者の誤用パターン

誤用	正用	件数	レベル別内訳			
			初級	中級	上級	超級
見える	見られる	10	1	5	4	0
	その他	2 ^[注8]	0	1	1	0
見られる	見える	1	0	0	1	0
	その他	3	0	0	2	1

正用が「見られる」で実際には「見える」が使用されているものが10件、正用が「見える」で実際には「見られる」が使用されているものが1件あった。「その他」を含めると、「見える」を使った誤用が12件、「見られる」を使った誤用が4件である。誤用に関しても「見える」の方が「見られる」よりも多く使用されていることがわかる。また、初級・中級レベルでは「見られる」を使った誤用が1例もないことから、下位レベルでの「見える」の過剰使用の傾向及び「見られる」の非用傾向がうかがえる。

表5 OPIのレベル別誤用率

	中級			上級			超級		
	正用	誤用	誤用率	正用	誤用	誤用率	正用	誤用	誤用率
見える	58	6	9.38%	37	5	11.90%	2	0	0.00%
見られる	6	0	0.00%	12	3	20.00%	3	1	25.00%

レベル別の誤用率は表5のとおりである。「見える」の誤用率については、上級でやや上昇しており、上級でも「見える」が十分に習得されていないことがわかる。超級になると「見える」の誤用率は0%になるが、これはデータが少ないため、本当に習得されたと判断するのは早計であろう。

一方で、「見られる」については、一見すると上級と超級で飛躍的に誤用が増えるように思われる。しかし、表2でも述べたとおり、中級では「見られる」の出現確率が上級の1/3近くと非用傾向が顕著であるため、中級の誤用率0%は非用の結果であるとするのが妥当であろう。もちろん、上級と超級の誤用率も無視できないものである。本稿の冒頭でも述べたとおり、日本語能力が上級レベルの非母語話者でも「見える」と「見られる」の使い分けに関する誤用は多いということを裏付けるデータであると言えるだろう。

4 教科書調査

4.1 日本語教科書における「見える」「見られる」の出現頻度

日本語教育では、「見える」も「見られる」（文法項目としては「可能形」）も、どちらも初級の文法項目として扱われている。そこでまず、初級の教科書で「見える」及び可能形が初めて導入される課と、その課における「見える」「見られる」が使われた例文数を調べ、表6にまとめた。

「見られる」を使った例文は、『みんなの日本語初級Ⅱ』と『日本語初級大地②』にそれぞれ1件ずつ提示されているのみである。一方、「見える」を使っ

表6 初級教科書における導入課と例文数

教科書	「見える」		可能形	
	導入課	「見える」の例文数	導入課	「見られる」の例文数
みんなの日本語初級Ⅱ	27課	10	27課	1
初級日本語げんきⅡ	15課 ^{※1}	2	13課	0 ^{※2}
文化初級日本語Ⅱ	31課 ^{※3}	1	17課 ^{※4}	0
日本語初級大地②	19課 ^{※5}	1	24課	1
初級日本語下	17課	8	16課	0

※1・3・5 「見える」は語彙扱い

※2 可能形の活用表では「見られる」が使用されている

※4 17課は『文化初級日本語Ⅰ』

た例文は、5つの教科書で合計22件使用されている。「見える」を使った例文が特に多いのは、『みんなの日本語初級Ⅱ』と『初級日本語下』の2冊である。どちらの教科書も、「見える」と「見られる」を同時期に導入することで体系的に指導しようとしているにもかかわらず、「見える」の例文ばかりが提示されているのである。これらの教科書を使って日本語を学んだ非母語話者が、「見る」の可能は全て「見える」を使って表すのだと考えても不思議ではないだろう。

次に、日本語教科書ではどの用法がよく使われているのかを見てみたい。下記の表7はそれぞれの日本語教科書における、用法別の出現数（実数）と出現比率を示したものである。

表7 日本語教科書における「見える」「見られる」の出現頻度

用法	形式	初級		中上級		日本語教科書全体	
		出現数	出現比率	出現数	出現比率	出現数	出現比率
<1>	見える	1	1.72%	1	2.86%	2	2.15%
<2>		9	15.52%	4	11.43%	13	13.98%
<3>		2	3.45%	1	2.86%	3	3.23%
<4>		11	18.97%	20	57.14%	31	33.33%
<5>		6	10.34%	0	0.00%	6	6.45%
<6>	両方	18	31.03%	2	5.71%	20	21.51%
<7>	見られる	11	18.97%	3	8.57%	14	15.05%
<8>		0	0.00%	4	11.43%	4	4.30%
<9>		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
合計		58	100.00%	35	100.00%	93	100.00%

初級においては用法<6>の出現比率が極めて高いことがわかる。日本語教科書が用法<6>の過剰使用を促進しているかのようである。これは、日本語教科書の改善すべき点の1つだと言えるだろう。

日本語教科書では、用法<6>にはすべて「見える」が使用されている。母語話者も基本的に用法<6>には「見える」を使用しているが、「見られる」が

間違いであるというわけではない。用法<6>を「見える」を使う典型的な例として提示するのは、不要な混乱を招く一因になるのではないだろうか。

(17) 天気がいい日には富士山が見えるんです。

(『みんなの日本語初級Ⅱ (第2版)』p.11)

本稿の分類によると(17)は用法<6>である。日本語の教科書には、(17)のように、見る対象が自然物である例文が「見える」の例として多く使用されているが、自然物は「鑑賞の対象」ととらえられることも多い。「鑑賞の対象」の場合、「見られる」を使用しても問題はない。「見える」を使うか「見られる」を使うかは、文脈や発話者の意図の微妙な差異によって決まるため、初級の段階でその使い分けについて説明するのは困難である。

(18) 私の部屋から学校の屋根が見える。

(作例)

例えば(18)の「学校の屋根」のように、見る対象が一般的に「鑑賞の対象」にはならないものでは、「見える」を「見られる」に置き換えることはできない。特に初級の段階では、まずは「見える」しか使えない例文を提示した方が、「見える」「見られる」の違いが理解しやすいのではないだろうか。

また、初級では用法<6>も含め状況可能(用法<5>~<8>)が多く提示されているが、コーパス調査で確認したとおり、実際の言語使用において最も使用頻度が高いのは用法<4>である。初級レベルでは文法体系より「いますぐ使える日本語」を学ぶことの方が重要であるため、もっと積極的に用法<4>を提示するべきであろう。

4.2 日本語教科書とコーパスとの比較

表7の用法別分布とコーパスにおける用法別分布との相関係数を、表8に示した。初級教科書は、名大会話コーパスとの相関が0.389と極めて低く、実際の言語使用を反映しているとは言い難い。一方、初級教科書と学習者会話データベースとの相関は0.554で、名大会話コーパスとの相関より高い数値となっ

ている。このことから、日本語教科書が非母語話者の言語使用に大きく影響していることがわかる。

表8 日本語教科書とコーパスとの相関

	初級教科書	中上級教科書	全教科書
名大会話コーパス	0.389	0.903	0.792
学習者会話データベース	0.554	0.909	0.897

5 まとめ

1節であげた3つの項目について、調査の結果、以下のことがわかった。

- 1) 母語話者・非母語話者ともに、用法〈4〉を多用している
- 2) 中級以下の非母語話者には、用法〈6〉の過剰使用の傾向及び「見られる」の非用傾向がうかがえる。上級以上になると、母語話者の言語使用に近づくが、誤用がなくなるわけではない
- 3) 初級日本語教科書は、用法〈6〉が過剰に提示されており、実際の言語使用を反映しているとは言いがたい。中上級教科書では、母語話者の言語使用に近づいている。

名大会話コーパス・日本語学習者会話コーパスどちらにおいても、出現数では「見える」が「見られる」を圧倒している。「見える」と「見られる」の使用比率だけを見ると、母語話者と非母語話者の言語使用は一致しているかのようである。しかし、用法別に見ると、両者の間には「見える」「見られる」の使用に大きな差異があることがわかった。「見える」と「見られる」を言語形式だけに着目して2項対立で使用頻度を比較するのではなく、用法ごとに母語話者と非母語話者の言語使用を比較検討することが重要である。母語話者コーパスと非母語話者コーパスの比較に基づいた用法ごとの使用頻度の比較という考え方は、他の言語形式の研究にも有効なのではないだろうか。さらにはこれ

らの検討は、日本語の授業や教材開発にも具体的に貢献できるものだと考えている。

〈大阪産業大学〉

【付記】

この研究は、国立国語研究所のプロジェクト『日本語教育データベースの構築—日本語学習者会話データベース』を利用して行ったものである。データとして『名大会話コーパス』及び『日本語学習者会話データベース』を利用させて頂いた。また、データの形態素解析には、京都大学情報学研究所—日本電信電話株式会社コミュニケーション科学基礎研究所共同研究ユニットプロジェクトによる『MeCab』0.98と、国立国語研究所による『UniDic』1.3.12を使用させて頂いた。各位に感謝申し上げたい。

注

- [注1] …… 山内・清水 (2001) は、能力可能でも「彼は手相が見られる」のように例外的に「見られる」が使用されるものもあるとしている。この場合の「見る」は「評価する・占う」という意味であり、「視覚で対象物をとらえる」という意味ではないため、本稿では扱わない。
- [注2] …… 飯田 (1997: 49) の「特出すべきもの」という表現を、筆者は「何か特別なもの、目立つもの (=特筆すべきもの)」という意味で用いていると解釈した。そこで、以後本稿では、「特筆すべきもの」という表現を使用する。
- [注3] …… 20代～80代の母語話者199人(女性162人、男性37人)による約100時間分の雑談を文字化したコーパスである。
- [注4] …… OPIのインタビュー339人分を文字化したコーパスである。母語別では韓国語170人、中国語47人、英語28人、インドネシア語12人、その他82人。
- [注5] …… 出現数の多寡は話題により左右される可能性があり、厳密には異なるコーパスにおける出現確率を比較することはできない。しかし、「見える」「見られる」は、特定の語との強い結びつきはなく、使う場面も多岐にわたるため、比較的話題に左右されにくい語であると言える。そのため、異なるコーパスにおける出現確率を比較検討することに、一定の妥当性があるものと考えられる。本稿ではこのような立場にたち、母語話者と非母語話者との出現確率の比較に基づいて、「過剰使用」及び「非用」という言葉を用いた。
- [注6] …… レベル別の人数及び語数は、中級188人(499,076語)、上級110人(355,478語)、超級9人(37,170語)である。
- [注7] …… 超級はデータが少ないため、中級と上級の2つで比較を行った。

[注8] …… 正用が判別できないもの(「見える」を使ったもの1件)は、「その他」として扱った。

参考文献

- 飯田透 (1997) 「見える」「見られる」再考『東京大学留学生センター紀要』7, pp.43-65.
東京大学留学生センター
- 下岡邦子 (2005) 「可能形態「見られる」と「見える」に関する一考察」『国語学論集』50, pp.158-138. 龍谷大学国文学会
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシタクスと意味』くろしお出版
- 山内博之・清水孝司 (2001) 「「～が見える」「～が見られる」」『日本文化学報』10, pp.107-119. 韓国日本文化学会
- 国立国語研究所データベース・データ集 (2013年9月30日参照)
<http://www.ninjal.ac.jp/database/>

〈調査に使用した日本語教科書〉

- 阿部裕子・亀田美穂・桑原直子・田口典子・長田龍典・古家淳・松田浩志 (2008) 『テーマ別上級で学ぶ日本語 (改訂版)』 研究社
- 荒井礼子・太田純子・亀田美穂・木川和子・桑原直子・長田龍典・松田浩志 (2003) 『テーマ別中級から学ぶ日本語 (改訂版)』 研究社
- 鎌田修・ボイクマン総子・富山佳子・山本真知子 (2012) 『生きた素材で学ぶ新中級から上級への日本語』 The Japan Times
- スリーエーネットワーク (編) (2013) 『みんなの日本語初級Ⅱ本冊 (第2版)』 スリーエーネットワーク
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター (編著) (2010) 『初級日本語下』 凡人社
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター (編著) (1994) 『中級日本語』 凡人社
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター (編著) (1994) 『上級日本語』 凡人社
- 坂野永理・池田康子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子 (2011) 『初級日本語げんきⅡ (第2版)』 The Japan Times
- 文化外国語専門学校編 (2013) 『文化初級日本語ⅠⅡ (テキスト改訂版)』 凡人社
- 山崎佳子・石井玲子・佐々木薫・高橋美和子・町田恵子 (2009) 『日本語初級大地②』 スリーエーネットワーク